日本の映画の歴史を考える上で、まず最初に出てくる のが弁士による活動写真「活弁」と呼ばれる上映形態であ る。日本に活動写真として輸入されてきた当時の作品は ほんの短いものしかなかった。その短い作品を上映する 際に興業として成り立たせるために作品解説する者をつ けたのが始まりとされる。

日本では元々人形浄瑠璃における太夫と三味線、歌舞伎における出語りなどの解説者といったナレーション文化が定着していたために、西洋では演奏のみであった上映に活動弁士なる解説者が活躍することとなる。今回取材した大阪での活弁上映の老舗「田中映画社」によると政治家の応援などをしていた弁士が活動弁士として活躍したとのこと。

1930年代にトーキーと呼ばれる音付きの映画が上映され始め、徐々に活動弁士は衰退していったのだが、現在でも一部その上映形態を継承する者が残っており、最近では逆に新しい上映形態として若者の間で一部復活している。

「活弁」の魅力は一番に弁士の語りである。今でも継承 されている関西最後の弁士と言われた井上陽一氏の「活 弁」を数本鑑賞したが、同じ作品であっても客層やその 時々の客の熱気などによって語りが少しずつ違っている。 もちろん上映前の口上は毎回違って当たり前なのだが、 作品の中にさりげなくご当地ネタが入っているなど、客に 寄り添いながら映画の中に引き込んでいくのである。当時 の映画興行では弁士の人気で同じ映画でも客入りが格段 に違い、また、当時の娯楽として大きな位置を占めていた 「活動大写真」であるから、人気活動弁士はまさにスター であったと言える。なぜそんなに違いがあるのかについて も後から述べることとする。また、「活弁」から生まれた「和 洋合奏団」は、単なる伴奏ではなく例えば「チャンバラ」の 語源となった三味線による殺陣の表現など、映画の効果 音的な部分も担っている。この「和洋合奏団」はバイオリン と三味線、ピアノといったまさに和楽器と洋楽器がコラボし た当時では異色の組み合わせであったといえる。

ここで当時の映画の作り方だが、当初は本当に短い作品であり、そんなに複雑なものでもなかったようだが、徐々に上映分数は長くなり、単純な話でもなくなってきたようだが、それはおそらく日本では「活弁」が定着していたからであり、そのような作品であっても十分に興業として成り立つと確信していたからではないだろうかと推察される。

井上氏によると、当時はセリフも適当で「いろはにほへと」 と言っているだけであったとか・・・もちろん全てではないと 思うが、今回制作してみて確かにそれでも成り立つところ もあることは確信できた。

日本の主に時代劇であるが、サイレント映画はチャップ リンほどではないが、確かに少しオーバーアクションである と感じる。音がないことを意識していたのか、そもそも音は ないのだからそういう物だと思っていたのかはわからない が、後期になってくるとそれほどセリフを言っても劇場では聞こえないということを意識しているようにも思えない。

今回、考察するために撮影用の台本を製作したが、最 初は音がないことを意識してト書きのみにするのがいいの か、あるいはセリフとしてではなく、後々テロップとして差し 込むためのセリフを書いておくべきなのかを検討したが、 結局、何も考えずに普通に撮影用台本を書いてもらった。 撮影現場では台本通りにセリフを喋ってもらい、音がなく なることを意識せずにお芝居をしてもらった。ただ、製作 側として、撮影監督に当時の撮影を意識してもらった。で きるだけカメラを固定し、まるで舞台を見せるようにきちん とお芝居を見せることを意識してもらう。お芝居を止めない ようにできるだけ長回しで細かくカットを割らない。撮影が 終われば編集作業に移る。とりあえず何も挟まずに台本 通りの順番でつないでみる。そこから最低限音がない状 態でも何の話なのか、製作者の意図するテーマは何であ るのかがわかる程度の解説と、要点だけ伝えるセリフをス ーパーとして挟んでいった。セリフのスーパーを入れること 以外は通常の映画の編集と何ら変わらない作業である。 ただ、セリフが聞こえない分だけ、表情や仕草のみで編集 点を決定できるところは音のある作品と違うところだろうか。 そして、ここからが「活弁」上映のための作業になる。弁士 がこの音のない映画を何度も見て、新たに上映用の台本 を書き下ろすのである。ここ最近何本も旧作に台本を書き 下ろし、活弁上映を行ってきたスタジオ OM の稲森誠氏 に担当してもらった。取材したところによると、まず、その作 品の舞台となる場所を調べるのだそうだ。その場所の特徴 や名産品などを調べることからスタートし、映画の背景をし る。そこから作品を何度も見る。そうするとセリフが自然と 聞こえてくるという。果たして先人の活弁士たちもまた、セ リフが自然に聞こえていたかは定かではないが、それぞれ が台本を作成したことは間違いない。ここに、先に述べた 活弁士の違いが生じるのである。つまり、同じ作品であっ ても活弁士によっては違う作品として見えるのである。 最後に音楽制作である。こちらは弁士と事前に打ち合わ せ、音楽をあてていく。こちらは伝統に拘らず、現代の 様々な楽器を使用していくスタイルの稲森氏お抱えの楽 士の参加により、ギターと太鼓での演奏となった。ギター の演奏は音色だけでなく、その奏法によって、様々な効果 音まで引き出してくれる。これまでの旧作でも和洋合奏団 とはまた違った、哀愁のある、時代劇にマッチした音色と なっている。

「活弁」とは正にライブなのだ。フィルムも上演のための1道具であり、フィルムだけでは成り立たない。これが日本の生み出した映画の世界であったのではないかと思う。今後もその伝統は受け継がれ、現代にあった新しい様式としても日本独自の文化として継承、発展していって欲しいと願う。